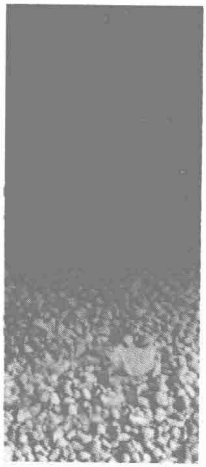
夕映え

川崎長太郎



河出書房新社

夕映え

昭和五十八年九月一日　初版印刷
昭和五十八年九月十日　初版発行

©一九八三

著者　川崎長太郎
発行者　清水勝
印刷　暁印刷
製本　大口製本

発行所　河出書房新社
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　〇三―四〇四―一二〇一営業
〇三―四〇四―八六一一編集
振替　東京〇―一〇八〇二
定価は帯・函に表示しています

目次

私小説家　七
暦　二七
流浪　四九
みちづれ　六七
ゆきずり　九五
鷗　一一五
お花の身の上　一三五
鳥打帽　一五一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

雨　一六七
断片　一八五
姪　二〇一
甥　二一七
途上　二三五
夕映え　二五七
†
対談――吉行淳之介＋川崎長太郎
作家の姿勢　二八一

装丁　藤田統子

夕映え

川崎長太郎作品集

私小説家

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

大正十二年九月一日の正午、突如として関東地方を襲った大地震に、小田原も家屋はおおかた倒壊し、続いて拡がった火災の為め、一面焼け野原と化していた。

焼けトタンを寄せ集めて拵えたようなバラック住まいを余儀なくされる両親や、一人きりの弟を焼け跡へ置去り、僅かな金をふところにし、細引きでしばった行李を担いで貨物列車へ乗り込み、単身東京入りした私は、省線高田馬場駅からそう遠くない、知人の家の三畳間へ起伏する身の上となった。

東京の下町も、大半瓦礫の廃墟と変貌したが、続ぞく大小のバラックがたち並んで、復興の意気すさまじいものがあった。故郷を捨てた出稼ぎ人の私も必死になって、地方新聞を相手にする通信社の埋草原稿を書いたり、不得手な少年小説など雑誌社へ持ち込んだりした。それと別に、時事新報という日刊紙の文芸欄主任だった佐佐木茂索氏の好意により、大家・流行作家を訪問して談話を貰い、三、四枚の原稿にまとめる仕事もやり出していた。先方には別段謝礼もせず、一枚一円の稿料はそっくり手前が着服する、いわばもの乞いに等しい申し出を承知の上で、談話頂戴に押しかけると大抵の作家は話してくれたが、たまには玄関払いを喰う場合もあったりした。

葛西善蔵氏は、足掛け四年間神輿を据えた、鎌倉のさる寺院が地震で半壊したところで、本郷三丁目の交叉点に近い、木造三階建の下宿屋へ移転していた。六畳の部屋へ、十幾つかとし下の愛人と同棲し、青森県下にある妻君の実家へ妻子がずっと別居中で、家族の離散は同氏の泣きどころとなって

いる模様であった。

小豆色の鳥打帽をかぶり、二十三歳のとし頃らしくまだニキビのあとも残っていそうな馬面に、鉄縁の貧書生じみた伊達眼鏡をかけ、襟垢のついた袷など着流す下駄ばきで、私は大きな柱時計が眼につく下宿屋の玄関へ這入り、出てきた女中に、佐佐木氏の名刺と自分のそれを渡し、葛西氏との面会を依頼していた。

当時、志賀直哉と並び、私小説家の典型視された氏をかねてから敬愛し、近作『椎の若葉』の如き、泥だらけな日常にあえぎながら、日射しを浴びて光る木の葉に合掌したりもする生活を、傍若無人に記述して憚らない作品など、身にしみて愛読した覚えのある私は、コチコチに硬くなり、葛西氏との初対面に心臓の動悸も一寸高まる勝手であった。

女中が引返し、その脚で二階の一番はずれにある部屋へ案内した。壁色のくすんだ三尺の床の間の隅に、日本酒の一升壜がみえ、氏は小さなニス塗りの机の前へきちんと正座していた。黒っぽい着物、帯をぐるぐる巻きにしめ、肺結核患者らしい生っ白く皮膚の薄手な、ロイド眼鏡をかけ、鼻下にチョビ髭はやす顔で愛想笑いされる氏は、私を時事新報から原稿の依頼にきた者と早合点される様子でもあった。

床の間近くに、油っ気のない頭髪を無造作にたばね、顔色の冴えない、私とあまりとし恰好に違いのない、小柄な和服姿の愛人が、膝へ赤ン坊の産衣に仕立てるらしい白いきれをのせ、ゆっくり針を動かしていた。

いく分赤茶けた畳表へ、ぎごちなく両手をついて頭を下げると、葛西氏も手の置きどころを改めて

一礼し、座布団をすすめてくれた。着ぶくれたような愛人は、私と眼が合うや、白粉気のまるでない丸顔をニヤッと笑った。

氏の作品の愛読者という自己紹介など、面と向ってはひどくテレ臭く端折り、口下手で世馴れもしていない青二才は、のっけから用件を切り出していた。

「つまり僕が話すことを君が原稿にして、佐佐木君からいくらか貰う訳ですかね」

と、葛西氏は少し舌の短かい人のもの謂でおだやかにいうが、なんか腑に落ちぬといいたげな顔つきである。

「ええ。先生にお礼も出来ませんし、虫のいいお願なんですが——」

と、口ごもる私はふところから鉛筆とザラ紙をとり出し、談話を筆記する用意にかかりながら

「二、三枚分で結構です。どうか」

と、いい、さもし気な頭の下げ方していた。

葛西氏の酒呑みらしく据わった眼は、一向にほぐれそうもない。

「この頃お読みになった作品か何かのご感想でも——」

「別にないですがね」

「じゃ、私小説に対するご意見——」

とか、なんとか、眼の前の座布団に坐ろうともしないで口説きたてるが、氏はただで喋らせるなんかもっての他、といわんばかりな面相で、とりつく島もない。私は気まずさに口がきけなくなり、伏目がちにうつ向いてしまった。

聽て、その場の空気に耐えかね、愛人へも目礼し立ち上った。すると葛西氏が机の前をはなれるので、私よりひと回り大きい人のあとから部屋を出、身の縮む思いしながら玄関先まで行き、送って頂いた氏に無言で頭を下げていた。

小田原では名の売れた弁護士の長男に生れ、私と同じ年齢で、文学青年仲間の関一郎は、大震災後某大学を中退してしまい、同郷の先輩牧野信一宅の書生に住み込んだ。

売り出しの新進作家牧野氏は、上野・桜木町へんの借家に、女房子三人の世帯をもっていた。明治時代、尾崎紅葉の玄関番しながら、創作にはげんだ弟子達の先例にならうかのように、牧野氏宅で関も小まめに廊下へ雑巾がけまでしたりして、書生の役目を一応果しながら、根が坊ちゃん育ちではあまり置く方の気に入らなかったらしい。牧野氏は懇意にしている葛西善蔵に依頼し、関の身柄がそっちへ移るはこびとなった。

札つきの寡作家で、私小説以外書きも書けもしない葛西氏は、鎌倉から出てきても名声と裏腹に貧乏しどおしで、払いが滞ってしまい、臨月の腹を抱えた愛人諸共（もろとも）、下宿屋から追い立てを喰っていた。知合いの編集者の口添えで、その人の住居に近い世田ヶ谷・三宿の借家へひとまず這入り、程なく赤ン坊も生れた。手不足な折から、関は歓迎されて葛西氏宅の書生に早変りし、雑誌社酒屋等への使い走りから、頼まれれば質屋へも出入りしたりする具合であった。家の中では台所の水仕事まで手伝い、旁がたいける口の関は、葛西氏の酒の相手もソツなくつとめていた。が、氏からも度たびすすめられ

る創作には、牧野氏宅にいた時同様、さっぱり手が出ない。いいものを書き上げ、氏のスイセンを得て、然るべき雑誌へ発表したい野望は山やまながら、短篇小説の腹案一つまとまらないていたらくであった。

そんなことで、くさくさしているところへ、葛西氏の愛人から質草を請け出すべく、質札と金を受取り、勝手知った方角へ足を向ける路すがら、関の気がふっと変り、彼は浅草方面へ一足跳びにとんでいた。ヤケ糞半分、六区に紛れ込んで映画をみ、暗くなると居酒屋へ寄ったり、吉原へ行って女郎を買ってひと晩泊ったりしている間に、所持金が殆んどなくなってしまい、質屋へ行けず、おめおめ葛西氏宅へ帰るに帰れず、彼は小田原へ舞い戻った。母親から金をせびりとり、上京したものの、まっすぐ世田ヶ谷・三宿の方へ顔を出し得ず、見当違いな早大裏の下宿屋に現われ、敷居の高くなった家へ詫びをいいに行ってくれ、と私に泣きつく始末であった。

通信社向けの埋草原稿等ものし、既成作家の談話を貰ってくるしがない仕事も続ける傍、私は念願の私小説を書いていた。気に入ったものが出来ると、談話頂戴の件でお目にかかったこともある徳田秋声先生に、お百度を踏んで読んで貰った。結果先生の眼鏡にかない、その仲介により、菊池寛が編集する、大正十四年二月号の『新小説』誌上へ掲載された。

処女作が、宇野浩二氏等一部の好評を得、すっかり気をよくした私は、鉄縁の伊達眼鏡も止め、文士訪問など辞退してしまい、月づきの下宿代が出る通信社の匿名仕事だけ続けて、もっぱら依頼される小説や雑文に精根を傾けた。生得左利きでもないが、馴染のカフェあたりで時たま盃を上げ、身辺もひとしきり賑やかなものになり勾配、購買慾にかられて古着屋から背広や和服類など買ってきた。

世間の復興景気に活気づく箱根の温泉旅館へ、魚をあきなう実家の方も、手狭ながら新築した家へ這入っていたりした。

大正十五年（昭和元年）の新年号・二月号と矢嗣ぎ早に『新潮』の創作欄へ自作が紹介されるや、鬼の首でもとったかのようにとりのぼせ、いっぱし新進作家気取りで、世話になった通信社へもさっぱり脚を運ばなくなり、署名原稿一本槍の売文渡世に踏み切った。

しかし、二十歳代なかばの、身の程もわきまえない若気の思惑は見事に外れていた。棚からボタ餅が落ちてこなかった。こっちから頭を下げて、短篇や雑文など文芸誌や新聞の文化欄担当者の許へ持ち込む雲行きに変ったものの、下宿代は滞りがち、時どき質屋の暖簾もくぐる昨今であった。

手土産代りに、関が小田原から持参したイカの塩辛一升入りの樽を、風呂敷に包んだりして、彼の詫びをいいに葛西氏宅を訪問すべく、早稲田大学裏の下宿を出た。油っ気なくのび放題にしたオール・バックの頭髪にグレーの鳥打帽をのせ、日やけした綿（めん）ラクダの二重回しをひっかけ、埃っぽい紺足袋にチビた駒下駄などはいていた。

十二月つき初めの、ひと雨きそうな空模様であった。

地図まで書いて、関に教えられた通り、省電から郊外へ行く私鉄に乗り換え、場末のだだっぴろい往来で下車した。二階家、平家が建て込む横丁へ這入り、目じるしにしてきたオブラート工場の裏手へ出、むさ苦しい路地へ折れてから間もなく、たずねる作家の住所をみつけていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com